

黒木穂彦著

御太則問答講釋

全

特36

756

館蔵書會育教本日大			
五		三	
九	二	七	
一	冊	架	函

函一冊

東新

014012-000-7

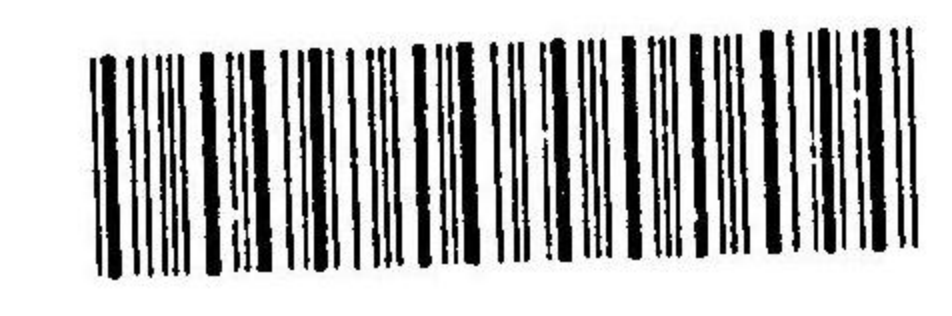
特36-756

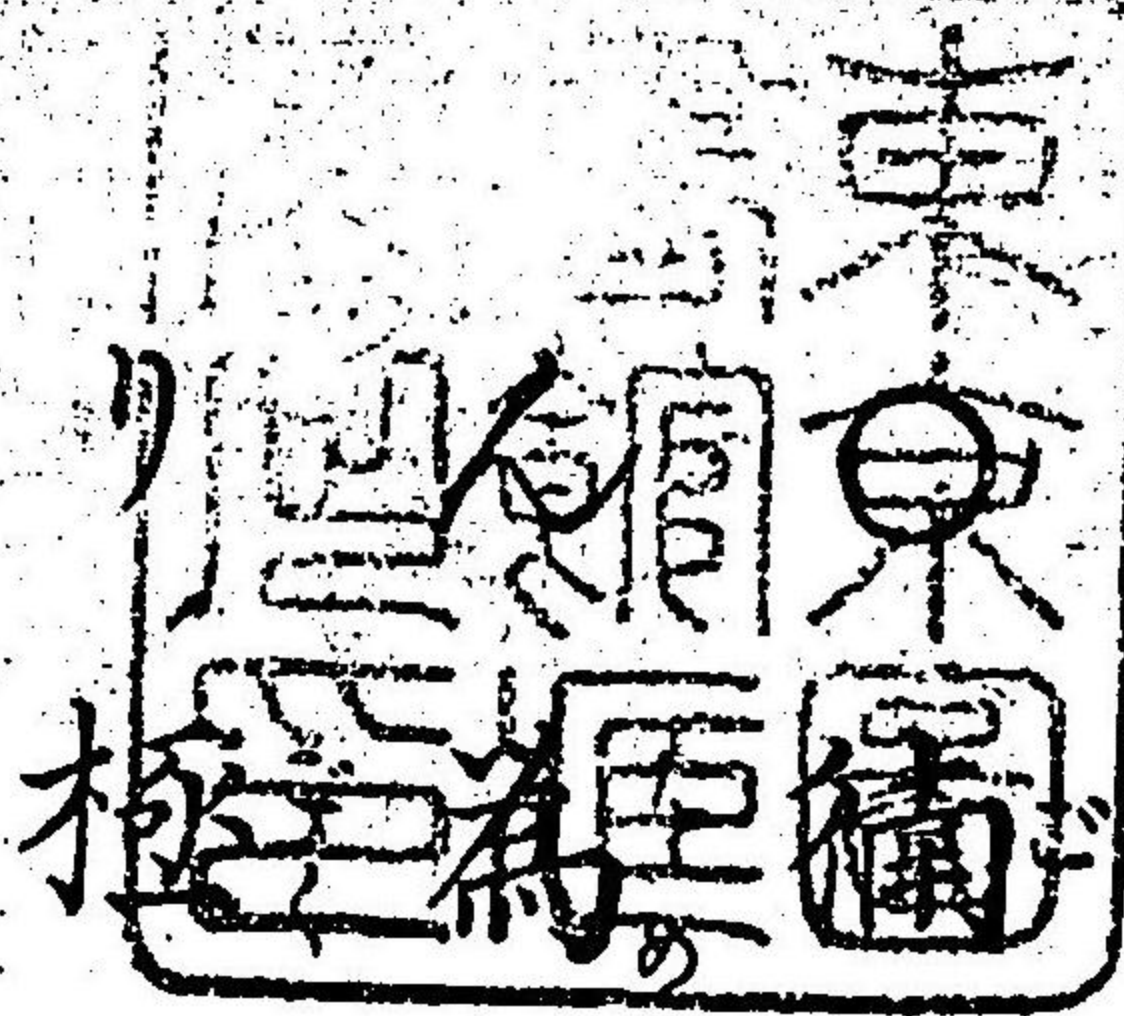
御太則問答講釋

黒木 穂彦/著

M12

ABB-0264





や

□

御太則問答講釋

補<sub>ひ</sub> 倂<sub>く</sub> と<sub>と</sub> の<sub>の</sub> 如何<sub>いかに</sub> の<sub>の</sub> 義<sub>ぎ</sub> なる

黒木穂彦述

の<sub>の</sub> 倂<sub>く</sub> の<sub>の</sub> 字<sub>じ</sub> 義<sub>ぎ</sub> を 秘<sub>ひ</sub> 密<sub>みつ</sub> 小<sub>こ</sub> せ  
造<sub>ぞう</sub> 字<sub>じ</sub> 小<sub>こ</sub> て 極<sub>ごく</sub> の<sub>の</sub> 意<sub>い</sub> 小<sub>こ</sub> せ  
抑<sub>おさ</sub> 大<sub>おほ</sub> 祖<sub>そ</sub> 參<sub>ま</sub> 神<sub>かみ</sub> の<sub>の</sub> 坐<sub>ま</sub>

不二講御太  
則教祖以來  
予始釋之半

し坐を其居宮城曰ひたる  
ものよして漢籍に所謂太  
一の居宮なる紫宮なり紫  
宮ハ即ち極星天と俱よ天  
樞不移して常に動うざる  
ものなれば彼の動かざる  
處に大祖參神の真靈を無

始無終よ鎮め坐し坐を  
以て紫宮と極星天とハ同  
物と思ひ星天の二字を畧  
きて譬へば主上の御名を  
申さむ直に御所と曰ふ如  
く大祖參神の居宮を指  
して極さハ曰ひるものか

火<sup>か</sup> 金<sup>かね</sup> 水<sup>みづ</sup> 土<sup>つち</sup> の 五<sup>ご</sup> 元<sup>げん</sup> 相<sup>あひま</sup> 化<sup>ま</sup> し 種<sup>いづ</sup>  
し 諸<sup>しよ</sup> 紀<sup>き</sup> を 定<sup>さだ</sup> め 給<sup>たま</sup> へ 故<sup>ゆ</sup> よ 風<sup>かぜ</sup>  
分<sup>わか</sup> ち 四<sup>よ</sup> 時<sup>とき</sup> を 建<sup>たて</sup> て 節<sup>ふし</sup> 度<sup>ど</sup> を 移<sup>うつ</sup>  
地<sup>ち</sup> を 旋<sup>まわ</sup> 轉<sup>てん</sup> ぶ さ し め 陰<sup>いん</sup> 陽<sup>やう</sup> を  
機<sup>き</sup> 心<sup>こころ</sup> の 事<sup>こと</sup> を 以<sup>もつ</sup> て 日<sup>ひ</sup> 月<sup>げつ</sup> 星<sup>せい</sup> 辰<sup>しん</sup> 大<sup>たい</sup>  
常<sup>つね</sup> 真<sup>まこと</sup> 靈<sup>たま</sup> を 鎮<sup>しづ</sup> め 給<sup>たま</sup> へ 其<sup>その</sup> 神<sup>かみ</sup>  
參<sup>まゐ</sup> 神<sup>かみ</sup> の 彼<sup>か</sup> の 動<sup>うご</sup> く 處<sup>ところ</sup> よ

萬<sup>よろづ</sup> 則<sup>のち</sup> こ 曰<sup>い</sup> ふ 事<sup>こと</sup> に 一<sup>ひと</sup> て 太<sup>お</sup> 祖<sup>や</sup>  
其<sup>その</sup> 意<sup>い</sup> は 太<sup>たい</sup> 極<sup>ごく</sup> の 給<sup>たま</sup> へ 天<sup>てん</sup> 理<sup>り</sup> な る  
れ ば 太<sup>たい</sup> 極<sup>ごく</sup> の 即<sup>すま</sup> ち 太<sup>たい</sup> 則<sup>ごく</sup> と 造<sup>ぞう</sup> 字<sup>じ</sup> 義<sup>ぎ</sup>  
を 秘<sup>ひ</sup> 密<sup>みつ</sup> よ せ ん 為<sup>ため</sup> の 如<sup>ごと</sup> く 字<sup>じ</sup> 義<sup>ぎ</sup>  
○ 太<sup>たい</sup> 極<sup>ごく</sup> の 前<sup>ぜん</sup> 条<sup>じょう</sup> の 如<sup>ごと</sup> く 字<sup>じ</sup> 義<sup>ぎ</sup>  
□ 太<sup>たい</sup> 極<sup>ごく</sup> と 何<sup>いか</sup> の 義<sup>ぎ</sup> 成<sup>なり</sup> や

種しゆの金かね質やう玉たま石いし相あひ製せいし然しかし  
て草くさ木き禽とり獸けもの虫むし魚うを化か生せいずる  
ものなまかさたば人の衣食いしょく  
住ぢやうよ至いたるまで天地てんちの間あいだよ  
阿ありとあらゆる萬ばん物ぶつ化くわ育いく  
乃なほ大たほ原もと質しつを始はじめ給たまひ神かみ小こ  
も人ひとにも此この恩おん頼らいを蒙まうらし

め給たまふ大たい主しゆ宰さいの神かみふれい  
淺せん間けん又またい金こん刀ひ比ひ羅らの靈れい驗げん  
も稻いな荷かりの利り益やくも不ふ動どうの感かん  
應おうも神かみてふ神かみ佛ぼつてふ佛ぼつ八や  
百ひやく萬まん千せん萬まん皆みな大だい祖そ參さん神かみの大だい  
主しゆ宰さいに漏もるものなく其その  
大だい靈れいの神かみ恩おんに攄よつて悉しつく

靈驗感應を顯し人又幸福

を授るものなりされば

大祖參神の靈驗の諸神如

來明王菩薩等の及ぶ所又

非む爰を以て莠草拔ら

廢せす人バ田苗實らず餘法を

妙法弘らす真

言念佛の邪宗の堂を毀ち  
八幡春日等の邪神の宮詞  
を焼くは正小正尊への忠  
誠衆生濟渡の善巧也  
子又教誡し神道諸宗を  
倒さんと思ひ念佛地獄無  
問然と曰ひ必ず妙法蓮花

を曰ひし糸に天下の一切  
の事に至心よ我が魂を祭  
らん者ハ福として得ざる  
ハかし事として成らざる  
ハなし這國の人背より未  
だ我が號を呼びて天御中  
主大神と稱す  
とありされ

の題目を唱ふべしと主張  
せし無類別品強情我慢の  
目蓮僧をら大祖參神の廣  
大無邊の神徳巖然よ坐し  
坐をハ知りしものに見  
たり其證跡ハ日蓮宗本化  
高祖年譜一日代蓮の妙見の事

〇 □ 誦 たる 〇 □ 毫 疑  
 躰 躰 べ の 妙 妙 疑  
 前 如何の 佛の 如何の 疑  
 条の 義なる 明王を 義なる 疑  
 如く なるや 神道 真似 疑  
 秘密 なるや 唱 疑

の 僧 也 質 信 亦 日 べ  
 神 知 弘 論 仰 蓮 理  
 靈 識 法 又 せ 僧 也  
 陰 皆 法 然 曰 釋 如 非  
 尊 悉 親 置 跡 也 斯 信 日  
 崇 大 鸞 其 他 神 達 摩 仰 せ し 也  
 事 參 神 名 摩 達 摩 仰 せ し 也



よせん為の造字なれば其  
意ハ大祖參神の即ち躰ニ  
曰ひたる事にして神靈を  
曰ふなり  
□拾坊ハ如何の義なるや  
○拾坊ハ所謂十方世界の  
義にして上下東西南北青

青しく涯りなき大祖參神  
の神靈より發する御心の  
天地間又充滿せし其神徳  
を曰ひたるものなり  
□光弼心ハ如何の義なる  
や  
○光弼心ハ前条の如く秘

密みつにせん為ための造ぞう字じなれば  
其その意いバ虚こ空く心しんの事ことにして  
大おほ祖そ參ま神かみの真まこと靈らうごを紫むらさ宮みやよ  
鎮しづめ坐まし坐ます其その真まこと靈らうごよ  
發はつを御み心こころよて心こころの使つか役やく靈らうご魂たま  
端はなは畧りやくのな北きたの世よ界かい新あらた教きやう啓けい  
置おけ大おほ虚こ空くを包ほう藏ざうし給たまひ  
り

其その御み心こころハ人ひと造のてよ調てう製せいする  
電でん信しん機き械かい等とうハ更さらなり小ちひま  
真ま砂さ又また至いたる迄まで含がん藏ざうせざる  
ものなき故ゆゑよ虚こ空く心しんとハ  
曰いはひしものよして人ひとよも  
此こゝ心こころなかりせバ工く藝ぎをな  
し得えがたき木き像ぞうと等ひかしき

ものなり爰を以て楠正成  
の軍元立將の法なる人心  
を教誡せし条は凡人心の  
柔よして空也然も萬法は  
通して色形なくして是を  
用ゐる時の剛大也石を碎  
金をとらかき悉く是空心

の用よして柔を以て剛を  
制す譬へば鐵を以て石を  
碎くよ石損むる時の鐵も  
又損ず心の是柔なるを以  
て損する事なし故に剛敵  
をば力を以て不可攻必ず  
柔を以て可攻敵は亡せらる

事<sup>こと</sup>安<sup>やす</sup>し去<sup>こ</sup>々<sup>と</sup>とある如<sup>ごと</sup>く人<sup>ひと</sup>  
魂<sup>たましい</sup>の使<sup>つかひ</sup>役<sup>やく</sup>する人<sup>ひと</sup>心<sup>こころ</sup>すら其<sup>その</sup>  
無<sup>な</sup>涯<sup>かぎり</sup>の括<sup>い</sup>發<sup>はつ</sup>最<sup>さい</sup>も思<sup>おも</sup>議<sup>ぎ</sup>しが  
たきものなれば況<sup>いは</sup>や大<sup>おほ</sup>祖<sup>おそ</sup>  
參<sup>ま</sup>神<sup>かみ</sup>の真<sup>ま</sup>靈<sup>らう</sup>より發<sup>はつ</sup>をる無<sup>な</sup>  
量<sup>あき</sup>の虚<sup>こ</sup>空<sup>く</sup>心<sup>しん</sup>なかりせば日<sup>ひ</sup>  
月<sup>げつ</sup>星<sup>せい</sup>辰<sup>しん</sup>大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>の位<sup>ぎ</sup>置<sup>ざ</sup>を素<sup>もと</sup>  
素<sup>もと</sup>

して運<sup>よる</sup>轉<sup>ひる</sup>をること能<sup>あた</sup>はる  
運<sup>よる</sup>轉<sup>ひる</sup>かすこと能<sup>あた</sup>はる  
人<sup>ひと</sup>の氣<sup>き</sup>息<sup>そ</sup>を止<sup>と</sup>むるに更<sup>さら</sup>か  
り山<sup>やま</sup>川<sup>かわ</sup>相<sup>あひ</sup>紊<sup>みだ</sup>れて草<sup>くさ</sup>木<sup>き</sup>成<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>  
せざるものなれば其<sup>その</sup>虚<sup>こ</sup>空<sup>く</sup>  
心<sup>しん</sup>ハ實<sup>じつ</sup>よ世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の柱<sup>ちゆう</sup>よして  
此<sup>この</sup>柱<sup>ちゆう</sup>あかりせば此<sup>この</sup>宇<sup>よ</sup>宙<sup>う</sup>を

曠間も保ち難きものなり  
されば風神を天柱國柱に  
曰ひ伊勢神宮の宮殿の真  
中の柱を心柱と曰ひしも  
此理なるべし爰を以て抑  
歴世の天皇の神武天皇の  
御志を継せ給ひて大祖參

神を信仰し給ふ其靈驗  
依て兵を強ふし國賊を平  
伏なさしめ或は大旱を救  
ひ給ひし数多の證跡ある  
中に辭別て神武天皇の大  
和國に坐し坐して大祖參  
神を祭り而して賊を撃ち

國を安らかに  
變天地と共に  
動うざる皇  
基を興し給ふ  
又人王卅六  
代皇極天皇元  
年ハ六月ヨ  
シ八月迄の大  
旱なれば諸  
社の神官ヨ雨  
降の祈禱を  
命じ給ふとも  
其效あし故

よ蘇我大臣奏上し給ひ改  
めて寺々の僧侶ヨ經を讀  
せ雨を祈らせ給ふヨ其功  
微ヨして田畠を潤さず其  
天災覽るヨ忍び難きを以  
て皇極天皇親ら大和國南  
洲の河上ヨ行幸し給ひ國

の 為 民 の 為 大 祖 參 神  
の 為 民 の 為 大 祖 參 神  
降 祈 給 天 下 潤 百  
姓 俱 皇 恩 喜 ぶ の 類 例  
救 擧 難 し さ 徒 又 卑  
位 の 神 明 大 祖 參 神 明 除 け  
の 外 日 不 皆 卑 敬 し 或 釋  
位 の 外 日 不 皆 卑 敬 し 或 釋

を 信 ず る こと 一 意 又  
大 祖 參 神 を 祈 ら ば 必 ず 嚴  
然 たる 靈 驗 相 與 給 ふ 又 毫  
も 疑 ふ べ かり ず 宥 賢  
迦 の 方 便 又 て 造 り し 佛 像  
を 信 ず る こと 一 意 又

著述魚出版人

鹿兒島縣士族

黒木穂彦

東京麻布區飯倉狸穴町  
五十八番地寄留

明治十二年四月十四日版權免許

明治十二年六月三日出版屆濟

價  
八  
錢



